HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日中両国におけるW.H.オーデン受容の比較研究 ： 日中戦争期を中心にする
Author(s)	陳, 琁
Citation	研究論集, 19, 213 (左)-231 (左)
Issue Date	2019-12-20
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.19.l213
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/79819
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_rjgshhs_19_p213-232_l.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgshhs.19.l 213

日中両国における W.H. オーデン受容の比較研究

── 日中戦争期を中心にする ──

陳　　璇（セン）

要　旨

W.H. オーデンは，日中の現代詩人に深く影響を及ぼした英語圏の詩人である。彼は日中戦争期に中国を訪問し，1930 年代最も重要な英語作品と言われるソネット連作「戦時にて」（“In Time of War”）を創り上げた。彼の訪問後，中国ではオーデン・ブームが起き，各地の文学誌や新聞で盛んに紹介・翻訳していた。特に，1940 年代に西南聯合大学におけるウィリアム・エンプソンの英詩の講義を通じて，中国の現代詩人たちが，積極的に彼の詩を翻訳，評論，受容していた。中国では，西南聯大の教員と学生が中心となり，オーデンの翻訳と研究を進めた。

一方，戦時下の日本では，『新領土』を中心とする反ファシズム的文学誌に，オーデン作品の翻訳が掲載されていた。とりわけいち早く紹介されたのが，オーデンが中国で発表したソネット「中国兵士」（“Chinese Soldier”）及び彼とクリストファー・イシャウッドの共著『戦争への旅』（*Journey to a War*）である。しかし，言論統制下の日本では，日本の知識人たちは時勢に配慮しなければならなかった。また，オーデンと共鳴していたのは，戦時下の詩人たちではなく，むしろ戦後の「荒地」派詩人であった。「荒地」派詩人たちはオーデンの詩よりも思想に関心を抱き，オーデンのエッセイを重要視していた。

このように，オーデンは鋭く対立していた日中両詩壇に，ほぼ同時期に紹介され，後年の日中の現代詩人にも影響を与えた。とりわけ彼の影響を受けた詩人たちは日中戦争を体験した世代である。彼等の書いた「危機」と「恐怖」の感覚に根ざした詩は，オーデンからの影響が大きいと考えられる。日本の戦後詩では，オーデンのエッセイや詩句がそのまま引用されていることが目立つ。一方で中国の現代詩は，オーデンの技法を様々な方面から摂取している。

はじめに

W.H. オーデン（Wystan Hugh Auden，1907–1973）は T.S. エリオットを継ぐ 20 世紀最大の英語圏の詩人である。1930 年，彼はエリオット主宰の『標準』（*The Criterion*）に詩作を発表してから，エリオットに称賛され，ヨーロッパの詩壇にデビューした。「オーデンの詩的出発は，第一次大戦後の世界経済恐慌の嵐をうけて，資本主義社会の不安とその階級的矛盾がいちじるしく顕在化されつつあった時代のさなかである。そして彼の詩の多彩な展開につれて，時代も社会も，はげしい加速度とともに落下してゆくのだ，すなわちファシズムの台頭，ヒットラーによる独裁，強制収容所，スペインの動乱と共和派の敗北，日本の中国侵略，そして第二次世界大戦へ ── これらの激動する現実こそ，彼をして詩に駆りたてたものだということを，読者は見落としてはならない。否，これらの時代の渦動の中にある人間と社会の病的徴候をあばき出し，『恐怖』と『不安』による人間精神の集団自殺を克服せんがために，彼はフロイトとマルクスを武器として，警告の詩を書きつづけてきたのである。文明と人間の『危機』こそ，彼の詩のパン種子であった。しかも彼の詩は，その急進的・政治的態度にもかかわらず，詩をして詩たらしめるべき芸術の自立性と独自性を獲得したところに，その真骨頂がある」[1]。1967 年，オーデンが全米文学賞メダルを受けた時，田村隆一（1923–1999）は敬意をこめて，このようにオーデンの詩的遍歴を日本の読者に紹介している。

田村とオーデンとの関わりを，概略的に確認しておく。田村は，オーデンを日本に紹介・翻訳する主要な詩誌『新領土』の寄稿者であった。『新領土』は，1937 年 5 月，春山行夫，村野四郎，近藤東，上田保を編集同人として創刊された。『新領土』という表題は，オーデンたちの詩と詩論を収める『ニュー・カントリー』（*New Country*）の名称に因んでいる。1939 年 5 月，田村は『新領土』の第五巻第 25 号に「唄のナイ金魚」「季節の運動」を発表して会員となった。同年，戦後日本のオーデンの重要な翻訳者・研究者の中桐雅夫（1919–1983）が編集する詩誌『LE BAL』にも参加し，鮎川信夫，森川義信，衣更着信らの知己を得た。田村の詩作とエッセイには，中桐が翻訳したオーデンのテクストが多数引用されている。1971 年には，ニューヨーク在住のオーデンを訪ねた。1973 年 3 月に出版された田村の詩集『新年の手紙』は，オーデンの *New Year Letter*（1941）と同じ題名であり，オーデンの六十才時の写真から感銘を受けて創作した作品「ある詩人の肖像」が収録されている。同年 9 月，オーデンが亡くなった時に，田村は「朝日新聞」に追悼文を書いている。

一方，中国の英文学研究者の王佐良（1916–1995）は，若時代に国立西南聯合大学で穆旦（1918–1977），杜運燮（1918–2002）などの詩人たちとオーデンの詩を読んだことを述懐した文章で，彼らがエリオットよりもオーデンの詩を好んでいたと書いている。なぜなら，「オーデンの詩

[1] 田村隆一「ある演説から　W.H. オーデン」，『田村隆一全集 1』河出書房新社，2010 年，444–445 頁。

の理解は容易である。彼の才気と警句が合わさった詩句はなおさらで，何より我々は，彼がエリオットと違って左翼であり，スペインの戦場で救急車の運転手を担ったこともあり，抗日戦争中の中国の戦場を訪問して，我々の心をうっとりさせるソネットを作り上げたことを知っている」[2]。西南聯大から卒業した彼らはオーデンを晩年まで愛好していた。穆旦は「Auden（早期のオーデンを指す）は相変わらず私の最愛の詩人だ」[3] と述べた。杜運燮も晩年の回想で，彼がエリオットより「オーデンの詩を愛読し続けている」[4] と述べた。1937 年，日本と戦争状態に入ると，日本軍を避けて中国の各大学は奥地に移転した。西南聯合大学は北京の北京大学，清華大学と天津の南開大学の三大学の教員と学生を統合して，雲南省の昆明に開校された大学である。ウィリアム・エンプソン（William Empson，1906–1984）は 1938 年から三年間，その西南聯大で英詩を講じた。穆旦たちはエンプソンの授業を通じてオーデンの詩と出会った。また，1938 年の春，オーデンとクリストファー・イシャウッドが中国を訪問している。直後，中国ではオーデン・ブームがおきた。そして，オーデンは広く中国の知識人に知られることとなった。中国の現代詩人たちは，オーデンの詩の技法と精神とを積極的に摂取・受容し，1940 年代の中国現代詩の基盤としていた。

田村隆一をはじめとする日本の戦後詩人と穆旦，杜運燮など西南聯大出身の中国現代詩人は，いずれもオーデンの影響を受けている。彼らは，1920 年代に生まれ，日中戦争の期間に，少年期から青年期を過ごしてきた世代の詩人である。この世代の日中詩人たち自身は相互交流はないが，戦争体験とモダニズムの主知的詩意識が共通点であるといえる。

本稿では，日中戦争期を中心に，日中両国におけるオーデンの受容状況を考察する，そして，「対抗関係」が顕在化していた時期に，日中現代詩において認められる，潜在的な「対話」の可能性を提示する。

一　日中戦争と「オーデン」の受容

1　戦時下日中現代詩壇の対立

日本と中国におけるオーデンの紹介は，日中戦争期に展開された。1931 年に勃発した満州事変を始点とし，1937 年によって本格化する日中戦争は，それまで持続された日中近代文学における交互影響の関係[5] を一変した。その代わり，日本の「侵華文学」と中国の「抗日文学」が鋭

2　王佐良：《穆旦：由来与归宿》，《一个民族已经起来》，江苏人民出版社，1987 年版，第 2 页。

3　杜运燮：《一个民族已经起来》，江苏人民出版社，1987 年版，第 127 页。

4　杜运燮：《我和英国诗》，《“九叶诗人”评论资料选》，华东师范大学出版社，1996 年版，第 405 页。

5　19 世紀の末から日中戦争勃発する前，日中文学の関係は，「中国―西洋―日本」という交互影響の構造に集約できる。従来の日中近現代詩の比較研究は主に二つの焦点をめぐって展開される：一つは「中国新詩と日本」，一つは「日本のモダニズム詩の発生と中国」。前者は魯迅，周作人および「創造

く対立するようになった。以下，その内実を概観する。

日本の「国家主義文学同盟」（1932），「文芸懇話会」（1934），「日本文学報国会」（1942）などの文学団体と対立したのは，中国の「上海文化界反帝抗日連盟」（1931），「中華全国文芸界抗敵協会」（1938）など反ファシズムの文芸団体であった。1937 年に，日本国内では国家総動員運動が制定され，数多くの日本人作家や詩人が中国に派遣され，所謂「ペン部隊」が成された。一方，中華全国文芸界抗敵協会（以下，「文協」）の「発起旨趣」では，「我々は分散的な各戦友の力を団結すべきであり，前線の戦士が彼らの銃を使うように，我々がペンを使って，民衆を発動し，祖国を守り，侵略軍を粉砕し，勝利を勝ち取るべきである」と呼びかけていた。日本側の『コギト』（1932 年 7 月創刊，1944 年 9 月終刊），『四季』（1933 年 5 月創刊，1944 年 6 月終刊），『日本浪曼派』（1935 年 5 月創刊，1938 年 8 月終刊）など国粋主義＝ファシズムの文学誌と対立する位置にあったのは，『抗戦文芸』（1938 年 5 月 4 日創刊，1946 年 5 月 4 日終刊）をはじめとする中国各地で創刊された「抗日」を主旨とする文学誌であった。

かつて，郭沫若，郁達夫，田漢，穆木天など渡日した知識人たちは，1921 年に東京で成立した中国の現代詩人団体「創造社」の同人となっていた。日中戦争が勃発した後，彼等はほぼ全員が「文協」に参加した。1926 年に東京帝国大学文学部フランス語科を卒業した穆木天は，1928 年に同科を卒業した三好達治と校友であった。両者とも東大でフランス象徴主義を学んでいた。穆木天については，「初めて西洋の象徴主義における『純粋詩』（La poésie pure）概念を中国の文壇に導入し，遂に壮大な『純粋詩』のライティング・ブームを先駆けた」[6] と中国の研究者が指摘している。三好達治の第一詩集『測量船』（1930）は，「伝統的抒情性と西欧象徴詩の批評性を渾然と融合させ，新しいリリシズムを開拓したもの」[7] として，彼の詩壇的名声を確立させた。しかしながら，東大出身の二人の詩人は日中戦争については，正反対の立場に立っていた。「現時代の詩歌は民族解放戦争の呼び声である」[8] と主張する穆木天はリアリズムの詩創作に転向し，反ファシズムの立場に立っていた。三好達治は『文学界』（1938.10）で発表した「おんたまを故山に迎ふ」をはじめとして，『捷報いたる』（1942），詩集『寒柝』（1943），『千戈永言』（1945）という，所謂戦争翼賛詩集三部作を相次いで出し，ファッショ的「国民詩人」

社」同人の郭沫若，穆木天，馮乃超など渡日した中国知識人たちの詩活動と日本の関係を考察対象とする。中国の近代文壇におけるバイロン，ホイットマンなど西洋詩人の紹介やロマン主義，象徴主義など西洋の文芸思潮の受容に対して，媒介者という役割を果たした日本が重要視される。後者は，安西冬衛を代表とする日本の初期のモダニズム詩人たちが植民地の大連で創刊した『亜』（1925 年 11 月創刊）と草野心平を中心とするアナーキズム詩人たちが中国の広州で創刊した『銅鑼』（1925 年 4 月創刊）を研究対象とし，主に日本初期のモダニズム詩運動と中国の繋がりが問題視される。

6　刘静：《穆木天文学起点与日本因素》，《重庆文理学院学报（社会科学版）》2010 年第 6 期，第 29 页。

7　『精選版日本国語大辞典』，小学館，2006。

8　穆木天：《关于抗战诗歌运动》，《文艺阵地》第 4 卷第 3 期，1939 年 12 月 1 日。

になっていた。

また，『抗戦文芸』（1938.5.14）には，郁達夫が「日本の娼婦と文士」を発表した。彼は日本留学中，佐藤春夫など日本の文学者と頻繁に交際していた。1938 年 5 月，「ペン戦士」の佐藤春夫は文芸春秋社の特派員として中国の華北に滞在した。同年，彼は「軍国の春」，「国旗を謳ひて」，「盧溝橋畔に立ちて歌へふ」，「南京空襲の報を聞きて」など時局詩，戦争詩を収録した詩集『東天紅』を刊行した。郁達夫は「日本の娼婦と文士」にかつて彼が尊敬していた佐藤春夫等の日本人作家が，「日中交戦の土壇場」であらわにした「醜態」を風刺した。

穆木天，郁達夫と，三好達治，佐藤春夫の対立は，戦時下の日中文学関係の縮図と見做せる。

2　オーデンと日中戦争

そのような状況下で，オーデンは日中両国を訪れることになる。1938 年 1 月 19 日，オーデンとイシャウッドはロンドンから戦時中の中国へ出発した。彼らはパリから南下してマルセイユに至って，船で地中海を横断し，中国の香港に到着した。2 月 28 日香港を経て広東に入り，3 月 8 日漢口に至った。それから中国の鄭州，徐州，西安を巡回し，日本軍と対戦している北西の戦線を訪問した。4 月 21 日，漢口に帰ったオーデンたちはティーパーティーに参加して中国の知識人と交流した。同月の 29 日，彼らは日本軍が漢口で行った大空襲に遭い，その被害の惨状を目の当たりにした。その後，杭州に向け出発し，金華，温州など上海付近の南東戦線を訪れた。6 月 12 日，上海から船出し日本へ行った。長崎で数時間停留した後，東京で一泊，翌日船で横浜からアメリカに向けて出発した。

1939 年 3 月，オーデンとイシャウッドの共著『戦争への旅』（*Journey to a War*）が出版された。初版の内容は，「ロンドンから香港へ」と題する序詩 6 篇，イシャウッド執筆のエッセイとオーデンのソネット連作「戦時にて」（“In Time of War”）27 篇，及び「詩解釈」（“Commentary”）から成っている。オーデンは「詩で戦争を報道する初めてのジャーナリストである」[9] と言われた。彼は日中戦争をその 27 篇のソネットの中でも，クライマックスの部分として取り上げている。

このように，戦時下の中国を訪問したオーデンは，1930 年代「一番深刻的で，独創的な作品，恐らくその時代の最も偉大な英語詩である」[10] ソネット連作「戦時にて」を創り上げた。この連作は詩で記録される日中戦争史として読みとれる一方，オーデンの『人間論』（*Essay on Man*）[11] ともなっている。

---

[9] R.L. Duffus, “An Illuminating Journey to the War in China”, in *New York Times*, August 6, 1939.

[10] Edward Mendelson, *Early Auden*, London: Faber & Faber, 1981, p. 384.

[11] John Fuller, *W.H. Auden: A Commentary*, Faber & Faber, 1998, p. 235.

3　戦時下のオーデン紹介と翻訳

一方，オーデンの日中両国における紹介は，各国の「時勢」および文化政策に影響されている。オーデンの詩，特に彼のソネット連作「戦時にて」は，抗日戦争中の中国詩人に強く共感され，盛んに翻訳された。言論統制下の日本では，オーデンの詩と評論がいち早く紹介されたが，日本の知識人たちの時勢に対する配慮により，いわば「日本化」された「オーデン」として受容された。それゆえ，日中戦争期のオーデン受容は，オーデン自身の残したテクスト，日中両国における受容という三つの角度からの考察を必要とする。以下，オーデンが中国滞在時に展開した活動を中心に，日中両国のオーデン受容の状況を比較して考察する。

1938 年 4 月 21 日の茶話会で，オーデンは詩人の馮玉祥，劇作家の田漢（本名田寿昌），翻訳家の洪深および当時中国最高のモダニズム詩人と言われた穆木天など，中国の知識人たちと交流した。田漢はオーデンをバイロンに喩え，以下のように称賛した「まことに天涯比隣の如し/血潮花弁漢口の春/肩を並べて文明のため共に戦う/海を横行する長征は何人かのバイロン？！」[12] 返句として，オーデンはある亡くなった無名の中国兵士に創ったソネット「中国兵士」（“Chinese Soldier”）を次のように朗誦した。

Far from the heart of culture he was used:
Abandoned by his general and his lice,
Under a padded quilt he closed his eyes
And vanished. He will not be introduced

When this campaign is tidied into books:
No vital knowledge perished in his skull;
His jokes were stale; like wartime, he was dull;
His name is lost forever like his looks.

Professors of Europe, hostess, citizen,
Respect this boy. Unknown to your reporters
He turned to dust in China that our daughters

Be fit to love the earth, and not again
Disgraced before the dogs; that, where are waters,

[12] 田漢の詩原文は「信是天涯若比鄰/血潮花片漢皋春/並肩共為文明戦/横海長征幾拝倫⁉」である（『大公報』1938 年 4 月 22 日）。

Mountains and houses, may also be men.

翌日（4 月 22 日）の『大公報』で，オーデンの詩の原文と，洪深によるその翻訳が掲載された。オーデンの‘Abandoned by his general and his lice’（彼の将軍と彼の虱に遺棄された）という詩句は「无贵无贱，同已将他忘却」（貴賤問わず，共に彼のことを忘れた）に翻訳された。「この句は残酷すぎる，たぶん，ある危険な思想（この状況で将軍は永遠に彼らの兵士を置き去りにするわけがない）と翻訳者は確実に考えていた」[13] とイシャウッドは述べた。かつて，オーデンは E.R. ドッズ（E.R. Dodds）に寄せる手紙に，彼の行った国の中で中国が最も素晴らしい国であり，ヨーロッパの国々と全く異なっていると告げた。「人はだれでもスペインの文化を理解できる。なにが発生していたのか，それが何を意味しているのかを分かっている。だが，中国は理解することができない。戦争はさておいて，この国は人の命を少しも尊重していない」[14] と彼は述べた。オーデンとイシャウッドは戦時下の中国社会の各方面の困難な状況を目の当たりにした。オーデンの‘Abandoned by his general and his lice’という詩句はそのような認識を基づいて創られたのであると考えられる。

一方，日本では，『新領土』（1939.1）に，この詩が奈切哲夫に「支那にて」という表題で初めて日本語に翻訳された。以下にそれを引用する。

そこに文化はなかった
彼は上官に見捨てられたそして虱たちにさへも
蒲団の下で彼はその瞼を閉ぢた
そして息絶えた　この戦争が本の中に記されるとき
彼は無視されるだろう
彼は無学であった
彼のシヤレは陳腐であった…彼は愚鈍であった彼の名はその俤とともに永遠に失はれる

ヨーロッパのプロフェッサーたちや宿屋のおかみや市民たちは
この少年に敬意を表す　諸君の報道者たちには無視されて
彼は支那の埃となった　諸君の娘たちに地を愛させるために　そして又再び
犬たちの前で恥辱を受けさせないために
山河あるところ
家あるところに人あらしめるために

[13] W.H. Auden and Christopher Isherwood, *Journey to a War*, Faber & Faber, 1973, p. 144.
[14] Humphrey Carpenter, *W.H. Auden: A Biography*, Oxford University Press, 1992, p. 239.

彼は支那の埃となった。

奈切哲夫の訳文「彼は上官に見捨てられたそして虱たちにさへも」はオーデンのメッセージを正確に理解していた。しかし，日本語の訳詩には，“Chinese Soldier”という題名が「支那にて」に変わり，第一行目の詩句‘Far from the heart of culture he was used’（「文化の中心から遥かに離れているところで彼は使われた」）は「そこに文化はなかった」という短い決断の文型（determinative sentence）となり，文末に原文にはない「彼は支那の埃となった」という一行が繰り返された。オーデンの詩表現における豊かな細部は，奈切の訳詩では切り落とされている。「一九三九年一月号の翻訳で表題“Chinese Soldier”を『支那にて』としたのはなぜか。相手国の兵士を表題とすることがはばかられたからである。訳者，あるいは編輯者の，日華事変下の『時局』にたいする配慮があったことは明白である」[15] と中井晨は指摘する。すなわち，オーデンの“Chinese Soldier”は初めて中国語と日本語に翻訳された時，忠実に扱われなかった。オーデン詩の芸術表現および本意の伝達は両国の翻訳者がそれぞれの「時勢」に対する配慮によるものだったと言える。

オーデンが中国を訪問した 1938 年は，日中詩人の「対戦」が白熱化した時期であった。1938 年 3 月 27 日，即ちオーデンが北西の戦線から漢口に戻る一ヶ月前，「文協」が武漢で成立した。茶話会の出席者の田漢と穆木天は「文協」の理事であった。茶話会の翌日の朝，武漢大学出身の若き文学者，葉君健[16]（Mr. C.C. Yeh）は武漢滞在中のオーデンたちを訪ねた。「彼はエスペラント語の短編小説集『忘れられた人々』（*Forgesitaj Homoj*）の作者だ。この本で彼はペンネームの馬耳（Cicio Mar）を使っている。ジュリアン・ベル[17] が武漢大学の教授を担当していた時，彼はベルの教え子だった。彼も軍事委員会政治部のプロパガンダグループに従属する。そのプロパガンダグループはある自由主義または左翼の観点を持つ作家がいる，しばらく前，それらの作家は監獄に拘禁されていた。開戦した時，彼は日本にいた。日本の警察にアナーキズムの疑いで逮捕された」[18] と『戦争への旅』には記されている。郁達夫が「日本の文士と娼婦」を発表した『抗戦文芸』（1938.5.14）に，馬耳（葉君健）は「抗戦中に来華する英国新興作家 ── W.H. オーデンと C. イシャウッド」を発表し，いち早くオーデンを紹介した。馬耳は当時のヨーロッパの社会背景，イギリスの文壇状況を概説しつつ，1938 年までオーデンが既に刊行した詩集四冊，旅行記一冊および三つの戯曲を紹介した。馬耳は「アイロニーというのは，英文

15　中井晨『荒野へ ── 鮎川信夫と『新領土』（1）』，春風社，2007，159 頁。

16　葉君健（1914–1999），中国の翻訳家，児童文学者。1936 年に武漢大学外国語学院から卒業。1936 年，武漢国民政府軍事委員会政治部第三庁でプロパガンダの仕事を従事。

17　ジュリアン・ベル（Juliann Bell，1908–1937），イギリス作家ウルフの甥。1935 年に武漢大学の英文教授，1937 年 7 月スペイン内戦で亡くなった。

18　W.H. Auden and Christopher Isherwood, *Journey to a War*, Faber & Faber, 1973, p. 148–149.

学にはめったに見かけない言葉ではない。…バイロン詩の中で，アイロニカルな詩表現が数多く見られる。しかしながら，アイロニー以外に，積極的，健康的な新しい宇宙観を持つのは恐らくオーデンの一世代の若い詩人から始まったのである」[19] と指摘している。

『新大衆』(*New Masses*，1938.8.16) に掲載された「日本人との出会い」(“Meeting the Japanese”) では，オーデンとイシャウッドが日中戦争への姿勢を明白に表明している。「もし君が戦時下の中国大陸で四か月間を過ごせ，二つの戦線，何十の軍隊病院とたくさんの空襲現場を訪れれば，君が偏見のない中立者であることを覚えるのは難しくなる。特に，君の国は交戦国の政府とそれぞれに『友好的な外交関係』を維持している場合は。私たちにとって，広東，漢口で，黄河に沿って，日本軍は『敵』であった。中国の高射砲は『われわれ』の砲，中国の戦闘機は『われわれ』の飛行機，中国の軍隊は『われわれ』であった。今日までも，大多数の中国に滞在している外国人や役員もそのように感じている」[20]。それゆえ，オーデンの訪問直後，中国で「オーデン・ブーム」がおこった。洪深の「中国兵士」に続いて，邵洵美は「中国兵士」(Sonnet XVIII)，「ソネット十九番」(Sonnet XIX)，「彼らは恐怖を携帯する」(Sonnet XX) を翻訳し，「戦時にて」を中国作家が見習うべき「偉大な作品」[21] として紹介した。1941 年には朱維基によって，『在戦時』という題名で（序詩 6 篇，ソネット 27 篇及び紹介文を含む）「戦時にて」が全訳された。詩人の卞之琳は同年の『明日文芸』第二期で「戦時在中国作」と題して，このソネット連作の 6 篇を取り出して翻訳した。『抗戦文芸』（漢口），『大公報』（香港），『明日文芸』（桂林），『時与潮文芸』（重慶），『詩創造』（上海）など中国各地の文学誌，新聞（「文芸」欄）に，1938 年から 1940 年代の末期にかけて，オーデンに関する情報やオーデン詩の翻訳，紹介および評論が数多く掲載されていた。オーデン・ブームは，1940 年代の中国詩人が実作にオーデンの技法と詩精神を受容する基盤を築き上げていた。

日本側では，オーデンとイシャウッド共著の『戦争への旅』が，1940 年 2 月号の『新領土』に春山行夫の「戦争への旅行 ── オーデンとイシャウッド」という文章中で紹介された。1940 年，太平洋戦争が勃発する直前に，日本国内の言論統制は日増しに厳しくなっていた。この時期に，明らかに中国の立場に立っている西洋人が書いた日中戦争に関する旅行記をどのように紹介するかが問題になった。春山は原書における「戦争」に関する内容（戦地での観察，空襲場面の描写，日本人の捕虜との出会いおよび鮮明に日本軍を反対する姿勢を表わすところなど）を最大限に簡略化する一方，西洋人の「旅行」の新奇さと楽しさを際立たせる方法をとった。

---

[19] 马耳:《抗战中来华的英国新兴作家 W.H. 奥登 C. 伊粟伍特》,《抗战文艺》1 卷 4 期，1938 年 5 月 14 日，第 27-28 页。

[20] W. H. Auden and Christopher Isherwood, “Meeting the Japanese”, *W. H. Auden Prose*（volume 1: 1926-1938), Princeton University Press, 1996, p. 448.

[21] 邵洵美:《伟大的作品》，上海:《南风》1 卷 1 期（1939 年 5 月 15 日），第 48-49 页。

「戦争への旅行」の中で，春山は「詩人のルポルタージュという角度は，戦争という異常な事実や経験のために失われてゐない」と指摘しつつ，「彼らが杭州の前線を去った十二時間後に同地は日本軍に占拠せられた」，「彼等が立去った十二時間後 Meiki[22] は日本軍のために占領せられた」と，戦争に言及した箇所を二つにとどめている。また，中国の文学青年の葉君健[23] を紹介する場合，イシャウッドが原文に記述している，日本に滞在経験のある葉が，「日本人の警察にアナーキズムの疑いで逮捕された」という情報を削除し，「スペイン戦争で戦死したジュリアン・ベル」の教え子であり，「エスペラントで短編小説を書いてゐる」という「国際的な」情報だけを取り上げて紹介した。即ち，当局にとって「敏感な」内容を捨て，「安全な」内容だけを取り上げている。時局に対する春山の配慮が窺われる。

春山はあくまで，オーデンによる「普通の旅行者の接しない外国人，支那人」の観察を強調している。春山のやり方は時局に迫られた便宜上の措置であるが，オーデンのソネット XV（「戦時にて」）では，ファシズムについて，以下のように書かれている。‘Bound like the heiress in her mother's womb, /And helpless as the poor have always been.’[24]（「女相続人のように母親の子宮に縛られ，/困窮者のようにいつも無力になる」）。「母親の子宮」はファシズム支配下の国の権力を象徴する。「母親の子宮」から脱出すると自由を獲得できるが，日本の知識人たちは「困窮者のようにいつも無力になる」。「国の権力は，そのような弱小モダニストたちの思わくに比して，比較にならぬほど強大であった。…そして唯一のモダニストの集団『新領土』もついに昭和十六年（1941）廃刊して消滅してしまったのである。その終刊後，村野四郎は北園克衛とともに詩誌『新詩論』を出したが，彼らのペシミズムなどは，ゲリラの抵抗ほどの威力もなかった」[25] と村野四郎は述べた。戦時体制下の日本では，出版法，新聞紙法，国家総動員法等の言論統制が，オーデンのような外国詩人受容の障害となった。その結果として，戦中の日本に紹介された「オーデン」は「時勢に対する配慮」によって「去勢」された「オーデン」である。戦後，オーデンのソネット連作「中国からのソネット」を全訳した沢崎順之助は，『オーデン詩集』の「あとがき」でこのように述べている。「『中国からのソネット』の訳の部分を，平井（正穂）先生に献呈したい。その当時先生の書斎で，戦時下の検閲のはさみで幾個所も無惨に切られた『戦争への旅』を見せていただいたことを覚えているからである」[26]。

---

[22] 中国の地名「梅渓」である。浙江省湖州市安吉県の東北部に位置する。

[23] イシャウッドの原文で葉君健の名前は‘Mr. C.C.Yeh’と表記される。春山行夫の紹介文に「葉君健」という名前は出されていない。

[24] W.H. Auden, “In Time of War”, *W.H. Auden Prose*（volume 1: 1926–1938）, Princeton University Press, 1996, p. 674.

[25] 村野四郎「昭和という時代」，『講座日本現代詩史 3 昭和前期』村野四郎，関良一，長谷川泉，原子朗編，右文書院，1973，13 頁。

[26] 沢崎順之助「あとがき」『オーデン詩集』，思潮社，1993，189 頁。

しかしながら，日本の知識人たちがオーデンを戦時下の日本に紹介した努力によって，日本における反ファシズム的詩意識が，戦後の詩人たちに批判的継承されていたことは否定できない。

二　日本における「オーデン」

戦時下の中国と対照すると，日本側のオーデン受容は二つの特徴が顕著である

1　反ファシズムの立場と「翻訳中心主義」

1937 年 11 月に，『ニュー・ヴァース』（*New Verse*）がオーデン特集（Auden Double Number）を組んだ。その中に，作家のエドウィン・ミューア（Edwin Muir），グレアム・グリーン（Graham Greene），サー・ヒュー・ウォルポール（Sir Hugh Walpole），チャールズ・マッジ（Charles Madge）及び詩人ディラン・トマス（Dylan Thomas）らのオーデン評論が掲載された。数か月後，『ニュー・ヴァース』の編集者ジェフリ・グリグスン（Geoffrey Grigson）がそれらの評論をまとめ，「三十年代」を「オーデンの時代」（Auden's Age）と称し，1930 年代の若い詩人たちを「オーデン団体」（Auden Circle）[27] と命名した，「オーデンはモンスターである」というフレーズは，1937 年に名声の絶頂にあったオーデンの地位を端的に示している。

レイナー・エーミッヒ（Rainer Emig）が指摘するように「スティフン・スペンダー（Stephen Spender），ディ・ルイス（Cecil Day Lewis），クリストファー・イシャウッド（Christopher Isherwood）及びエドワード・アップワード（Edward Upward）のような他の若い作家の諸作品と一緒に，オーデンの詩が扱いにくい形容詞『ニュー』（new）となる基準を設定することを目ざしている。『ニュー・シグネチャー』（*New Signature*）と『ニュー・カントリー』（*New Country*）は彼らの作品のアンソロジーである，『ニュー・ヴァース』と『ニュー・ライティング』（*New Writing*）は彼らの文学誌である。…『ニュー』というのはいつも単純な芸術革新以上に意味する…それが…左翼の立場である」[28]。1938 年 5 月には，日本の詩誌『新領土』が創刊された。創刊号の後記に，編集者の饒正太郎が「『新領土』といふ名の意味は，土地を奪ふといふ意味ではなく，新しい開拓するといふ意味で，その点ナショナリズムではなく，極めて国際主義を標榜してゐる訳です」[29] と書いている。これについて「饒の記述の背後に，一九三五年三月に創刊された『日本浪曼派』に代表されるような，『懐古主義又は復古主義のデイレッタント』が文芸界の一翼を担う状況が思いだされよう。他方，同年二月創刊の『世界文化』は，全体主義あるいはファシズ

---

[27] Humphrey Carpenter, *W.H. Auden: A Biography,* Oxford University Press, 1992, p. 230.

[28] Rainer Emig, *W.H. Auden: Towards a Postmodern Poetics*, Palgrave Macmillan, 2000, p. 1.

[29] 饒正太郎「後記」，『新領土』創刊号，1938 年 5 月，77 頁。

ムへ向かおうとする論壇に対抗しようとしていた。『ナショナリズム』を克服するために『国際的に文学，文化の基準，動向を知ること』が必要とされる所以である」[30] と中井晨が指摘する。即ち，『新領土』の「新」は『日本浪曼派』，『コギト』，『四季』など志向する「復古主義」の「古」と対峙する意を表す。この「復古主義」即ち日本的伝統意識へ復帰する志向が吉本隆明に「先祖かえり」として批判され，「日本人の伝統的な感性秩序にふかく根ざしているとともに，ファシズムの完全な制圧下における日本の支配体制の本質とふかく照応している」[31] と指摘される。ここで，芸術の革新と政治の左翼の傾きを意味するオーデンの「ニュー」と『新領土』の「新」は，反ファシズムの点で共通している。

『新領土』には，奈切哲夫訳「支那にて」の他，足立重訳「スペイン」（1938.7），阿比留信訳「一九三九年・九月」（1940.1）などオーデンの名篇が，『新領土』紙上で紹介された。創刊号にはスペンターがオーデンの新著『The Ascent of F6』と詩集『Look，Stranger!』を評する文（上田保訳）を掲載し，オーデン詩における演劇的な特徴を指摘する。1938 年 5 月号には，岡橋祐がマイケル・ロバアツの『近代精神』の紹介時に，ニュー・カントリーグループ詩人たちが「政治の面に於て著しく行動的である」[32] ことを強調し，オーデンの政治的活動に表れた社会的情熱と真摯さを肯定した。同年 7 月号の，「W.H. オーデンについて」（近藤東訳）は当時のヨーロッパ文壇におけるオーデンに対する賛否を紹介した。9 月号には，エドマンド・ウイルスンの「オーデン論」（外山定男訳）が掲載される。ここでは，オーデン・グループの若い詩人たちが「社会改革への一頃の情熱を失って，漠然とした弛緩の時期に冷却の時期に入って来ている」[33] と指摘されている。10 月号では，G.W. ストウニアがオーデン詩におけるエリオット，ホプキンズ，ホイットマン，キップリング，形而上詩人の影響を論じる文章「オーデンの過程」を紹介した。『新領土』に掲載された最後のオーデン論は，スペンターの「W.H. オーデンの重要性」（安藤一郎訳，1939.9）である。この文章で，スペンダーはオーデンの技法上の創新さを分析する上に，「吾々の四囲や吾々の生活環境に重大な関係をもつ形態に永久の人間的価値を解明する」オーデンの重要な貢献を強調した。スペンダーは「戦時にて」のソネット XXIII を例として，オーデンがリルケの「オルフュウスに寄せる歌」（“Die Sonette an Orpheus”）に基づいて創新したソネットの作法を「近代詩の技法に真の貢献」であると評した。訳者はスペンターが取り上げたソネット XXIII 後半部の二つのスタンザを日本語に翻訳している。

以上，上記の翻訳と紹介の状況から鑑みるに，『新領土』はヨーロッパの詩壇動向を敏明に察知し，オーデンに関する情報や論説を素早く日本に紹介した。しかしながら，「翻訳中心主義」

---

[30] 中井晨『荒野へ ── 鮎川信夫と『新領土』（1）』，春風社，2007，10-11 頁。
[31] 吉本隆明『詩学叙説』，思潮社，2006，228 頁。
[32] 岡橋祐「マイケル・ロバアツの『近代精神』」，『新領土』1938 年 5 月号，23 頁。
[33] エドマンド・ウイルスン「オーデン論」，外山定男訳，『新領土』1938 年 9 月号，340 頁。

の『新領土』には，外国文学の情報が積極的に紹介された一方，日本人のオーデン論はほぼ皆無である。上田保が記すように，「近頃丸善などへ行ってみると，洋書の文庫類の棚までが非常に減少して，ほしいと思ふ本も容易に手に入らないようになった」[34]。海外の情報源を失った『新領土』は，1941 年 5 月に終刊を迎えた。

2　オーデンに共感したのは「荒地」派詩人である

オーデンは戦時下の日本で紹介されたが，オーデンに共感したのは，戦後の「荒地」派詩人達である。中桐雅夫が「lost generation の告白」（詩誌『荒地』1947.10）で述べたように，「彼ら（オーデン・グループを指す）が本格的活動を始めた頃は，すでにその書物の入手は困難であったが，雑誌『新領土』はよく彼らのエッセイを紹介して，彼らを喜ばせたのである。しかし，正直にいえば，僕らはその頃彼らの政治的なコミュニスティックな詩をあまり好まなかったようで，むしろそのエッセイから，同じ反ファシズムの立場にあるものとしての共鳴を感じていたようである。そこにおいて，僕らは一般的に言えば，政治と文学という重要な問題に遭遇したわけであった。この問題は，戦争が終った今日，なお僕らの当面している重要問題の一つである」[35]。加島祥造は，より明確に「荒地」派詩人におけるオーデンの意味を指摘する。「僕達にとって，現在，社会と或いは政治と何処かの面で切り結ばぬ思想は，たよりにならず又信じられもしない。ニュー・カントリイ派の作家達が『荒地』からの回復を，どの様な方向に取ったかというこの章の問題は現在の僕達に様々の示唆を投げる」[36]。即ち，「如何にして主体的な『詩の行為』を回復するか」，「『詩的言語』の社会的機能をどのようにして回復するか」[37] という課題をもった「荒地」派詩人達は，オーデンを代表とする 1930 年代の若い世代の英詩人たちを参照項としていた。

一方，中桐が指摘する通り，日本の戦後詩人たちはオーデンの思想的立場に関心を抱き，詩よりもオーデンのエッセイの方が彼等に重要視された。従って，戦後詩人の詩作には，オーデンの作品への言及がある。田村隆一の作品はその典型である。次の「水銀が沈んだ日」を例に確認しよう。

「日本には一九三八年に行った　それも羽田に一時間だけね
まっすぐ戦争の中国へ行ったのだ

---

[34] 上田保「後記」『新領土』1940 年 2 月号，306 頁。
[35] 中桐雅夫「lost generation の告白」，『現代詩文庫 38・中桐雅夫詩集』，思潮社，1971，124 頁。
[36] 加島祥造「W.H. オーデンの位置」，『荒地詩集 1951』荒地同人会編，国文社，1975，236 頁
[37] 高橋伸一「『荒地』派詩人による戦争責任論についての一考察」，『千葉大学社会文化科学研究』，1997 年 2 月，53 頁。

イシャウッドといっしょにね」

寒暖計の水銀が沈んだ日
「戦いの時」のなかにぼくはいた
詩人の大きな手がぼくに別れの握手をした

「水銀が沈んだ日」は 1971 年に田村がニューヨークでオーデンの住所を訪れたことを記述したものである。詩の題名はオーデンが 1939 年 2 月に創った詩「W．B．イェイツをしのんで」（“In Memory of W．B．Yeats”）中の詩句“The mercury sank in the mouth of the dying day”（「暮れゆくその日の口のなかで水銀は沈んだ」[38]）に由来する。寒暖計の水銀が沈んでいくイメージが，イェイツが亡くなった真冬を指す一方，第二次世界大戦が全面的に勃発する前，危機と恐怖が世界に蔓延している状況を意味する。ここで，田村は現実と歴史という二重の意味を持つイメージ「水銀が沈んだ日」を通じて，オーデンとの交流を記念する。最後の，「別れの握手をした」は，日本の戦後詩人とオーデンとの共鳴を象徴している。「水銀が沈んだ日」の他，『新年の手紙』に収録する「ある詩人の肖像」，「新年の手紙（その二）」および詩集『誤解』（集英社，1978）所収の「命令形」，「九月一日」などの作品には「オーデン」への言及が顕著である。また，田村の詩作にはオーデンの詩の引用も認められる。例えば，「命令形」にはオーデンの「W．B．イェイツをしのんで」中の第三部分の四連目を接ぎ合せている。「ある詩人の肖像」と「九月一日」には，オーデンの「一九三九年九月一日」（“September 1，1939”）の詩句「ぼくらはたがいに愛しあわねばならぬ，さもなければ死」が引用されている。また，オーデンの『染物屋の手』に収めるエッセイ「詩人と都市」（“The Poet & The City”）の内容は，田村の「草競馬」（『誤解』1978），「都市論」（『水半球』1980），「一冊の詩集」（『5 分前』1982）などそれぞれの作品に引用されている。田村が引用するものは，全て中桐雅夫の翻訳によるものである。次の「一冊の詩集」を例に挙げておく。

イギリスのヨークシャー生れの詩人
W．H．オーデンは書いている
「あらゆる詩人は爆発，雷雨，大竜巻，大火災，
廃墟，大殺戮の壮大なシーンを讃美する。
詩的想像力は，政治家にあっては，まったく望ましくない
資質である」。

[38] 「W．B．イェイツをしのんで」中桐雅夫訳，『オーデン詩集』福間健二編，小沢書店，1993，69-73 頁。以下同。

この作品は，人間世界の崩壊に直面するときの，詩人と政治家の相異を表現している。オーデンは「作ること，知ること，判断すること」という一文に「あらゆる詩は，その実際の内容がなんであり，みた目の関心事がなんであろうと，想像的畏怖に根ざしているものです」[39] と指摘している。即ち，「詩的想像力」は詩人にとって根本的な資質である。かつて，田村が「半世紀の間に，二つの大戦を経験しなければならなかったわれわれの文明が，この地上でもっとも破壊したものはなんでしょうか。無数の人間，おびただしい物量，そして多くの都市と寺院，その他いろいろなものが考えられます。それにもかかわらずあなたが詩人なら，それは言葉と想像力だときっと答えてくれるでしょう」[40] と述べていた。「荒地」派詩人にとって，言葉と想像力の破壊された「荒地」からの回復は，彼らに与えられた課題であった。よって，日本の戦後詩人たちは必然的に，主体的な詩的行為と詩的想像力を強調するオーデンに共感する。要するに，日本の戦後詩人に対して，オーデンの「詩人」という職業，及び「詩」という芸術に関する思考は，多大な影響を与えている。

三　中国における「オーデン」

中国の事例に戻ろう。中国におけるオーデン受容は 1940 年代に最高潮に至った。言論統制下の日本と異なり，1940 年代の中国ではオーデン作品は積極的に紹介されていた。ヨーロッパのオーデン論の翻訳が中心であった『新領土』と異なり，この時期の中国では，欧米のオーデン論の紹介がある一方，中国人による評論も多い。中国の場合，西南聯大の教員と学生たちが，その中心であった。

その背後には，ウィリアム・エンプソンの存在がある。日本でも教鞭を執ったが，その影響が最も大きかったのは，中国での活動である。1937–1939 年と 1946–1951 年の二度，中国の北京大学で英文学の講師を勤め，抗戦時期に中国の大学と一緒に雲南省の昆明へ移転した唯一の外国人教授であった。とりわけ，最初の講師時代に，彼はオーデン受容に甚大な影響を与えた。西南聯大でのエンプソンの教え子である，穆旦，杜運燮，袁可嘉，鄭敏，王佐良らは中国の若い世代の現代詩人でもあった。「当時，オーデンと時をおなじくして詩を書いていた英国の若い詩人でありまた評論家であったギレン・エンプソンは，西南聯合大学で『現代の英国詩』の講義を担当し，穆旦はかれと直接に行き来をしていて，深い薫陶と影響を受けていた」[41] と唐祈は書いている。王佐良も西南聯大での学習生活を以下のように回想する。「戦争の初期には，

---

[39] W.H. オーデン『染物屋の手』中桐雅夫訳，晶文社，1973，83 頁。

[40] 田村隆一「ぼくの苦しみは単純なものだ」，『田村隆一全集 1』，河出書房新社，2010，366 頁。

[41] 唐祈「現代の傑出した詩人穆旦 ── 詩人の逝去十周年を記念して」，秋吉久紀夫訳，『穆旦詩集』，土曜美術社，1994，237 頁。

図書館は後で建てられたものよりも，ずっと小さかったが，備えられている僅かな書籍，とりわけ外国から運び来られたばかりの宝にも似たあたらしい書物は，礼儀をも弁えぬ飢餓でもって呑み込まれた。…しかしこれら聯合大学の若い詩人たちは，けっしてかれらのエリオットとオーデンを，むだには読まなかった。…いつも午後になると，並みの中国茶を飲みながら，田舎からやって来た農民や小商人の雑踏するなかに身を割り込ませ，これらの若い作家たちは，切実にそして熱心に技術的な細部について討論している。討論は熱中すると，時には夜中にまで延びる」[42]「これらの一切はエンプソンに始まったのである。…彼の講義『現代の英国詩』は内容が充実しており，資料の選択も斬新であった。彼はホプキンズからオーデンに至るまでの詩人たちについて講義をしていた。選出された詩人の中では，エンプソンの同輩詩友が少なくなかった。従って，彼の解説は常套の学究的なものではなく，書物に見つからない内情および彼が言語に対する綿密な分析であった」[43]。エンプソンはオーデンについて講義し，彼の詩的分析法も中国の詩人に影響を与えた。彼の『曖昧な七つの型』（*Seven Types of Ambiguity*，1930），『牧歌の諸変型』（*Some Versions of Pastoral*，1935），『複合語の構造』（*The Structure of Complex Words*，1951）などの著作に一貫していたのが「綿密な読み」（close reading）という分析方法である。

オーデンの中国での受容のされ方は，抗戦時期の中国現代詩の発展状況と関与している。艾青が指摘する通り，中国抗戦詩の「単純的な愛国主義と空洞化された国民精神の叫喚が，常に読者の騒がしい情感を騙すために使われる。普通の詩人は，激動的な情緒の下で，抗戦に対して政治的または哲学的な思考をする能力がない」[44]。また，詩人の陳敬容が当時中国で流行していた作詩法を次のように形容する「一つは『夢よ，薔薇よ，涙よ』を歌い尽くす，一つは『憤怒よ，熱血よ，光明よ』を怒鳴り尽くす。結局，前者が人生から脱離し，後者が芸術から脱離した」[45]。即ち，現実の生活と乖離して個人的な哀れや怨みに溺れるか，芸術から脱離した空虚な内容で，技術の面も粗末である中国の現代詩にとって，オーデンの詩法はそれらの欠陥を克服するための方法論として受け入れられていた。中国の現代詩はどのように抗日戦争という巨大な社会的現実に応ずるのか，そして，詩の言葉がどのように活性化するのかという問題に対し，中国の詩人はオーデンを手本としていた。

穆旦，杜運燮，袁可嘉，鄭敏という四人の西南聯大出身の詩人は「九葉」派[46] 詩人と呼ばれる

---

[42] 王佐良「ひとりの中国の新しい詩人 ── 原載　ロンドン LIFE AND LETTERS 誌一九四六年六月号」，秋吉久紀夫訳，『穆旦詩集』，土曜美術社，1994，224 頁。

[43] 王佐良：《穆旦：由来与归宿》，《一个民族已经起来》，江苏人民出版社，1987，第 2 页。

[44] 艾青：《抗战以来的中国新诗 ──〈朴素的歌〉序》，《文艺阵地》第 6 卷第 4 号，1946 年 4 月 10 日。

[45] 默弓：《真诚的声音》，《“九叶诗人”评论资料选》，上海：华东师范大学出版社，第 61 页。

[46] その名称は 1981 年に江蘇人民出版社が出版した彼等のアンソロジー『九葉集』から由来したのである。穆旦らの他，詩人の辛笛，陳敬容，杭約赫，唐湜，唐祈を含む。

グループに属していた。『九葉派詩選』[47]（人民文学出版社，1992）の「序言」では，編集者の藍棣之が「九葉派は西洋の 20 世紀に，パウンド，エリオット，イェイツ，ヴァレリー，リルケを代表とするモダニズム詩人に影響された流派である。オーデンらは第二次世界大戦中，このような詩風を継続して発展させ，その動乱な世界を書いた。九葉詩人は特にオーデンから強い影響を受けている」[48] と指摘する。以下，それを具体的に確認していこう。

1）科学技術の専門用語の使用。さしあたり実例を以下に列挙する。「いっさいの形無き電力のすべての中枢をしかと握る」（穆旦「五月」），「自由な空中できれいな電子が/小さな小さな宇宙を抱えて，光をきらめかせながら，/すべてのものをとり他の電子と化合する」（穆旦「旷野のなかで」），「このウイルスはミュンヘンの温床に/繁殖している，臆病な宥和政策に成長している」（杭約赫「復活の土地」），「真理の周りを回っている衛星に出発する」（杭約赫「復活の土地」）などがある。

2）オーデン的直喩。例えば「…私たち二十歳の引き締まった肉体…/まるであの土で作った鳥のうたのように，…」（穆旦「春」），「私が難民を満載しているおんぼろ船のように，/アスファルト道路の上に舵を失ってしまった」（杜運燮「月」），「町は/大塊の野原の中央に，驚かされたけもののように/一群にかたく縮こまっている」（杜運燮「第一次飛ぶ」），「わたしはしわがれた陀螺のように，/奮い立って渦の急流に飛び込んでいた」。（辛笛「字が読める以来」）。一般に，直喩が主意とするもの（tenor）と，主意が仮託されているもの（vehicle）は類似性によって関連付けられる。しかし，これら「オーデン式」の直喩は，主意と仮託されたものの間に表面的な関連性が見られない。例えば，「ここで戦争はまるで記念碑のように単純だ」，「彼等は財布のように恐怖を持ち歩き/大砲のように地平線から畏縮する」，「冬はオペラのように彼らの注意を奪う」など。袁可嘉は杜運燮を例として，「現代の詩人は... 表面に無関係と見られながら，実質的に類似している物事のイメージあるいは比喩を発見することで，自分自身を精確的，忠実かつ有効に表現する。この原則により創り上げられたイメージこそ，驚かせる新奇さと正しさ，豊かさを持つ。一方では，それが読者を刺激する能力を獲得し，読者を容易に詩の芸術効果を受け取らせる。他方では，読者に感性のバランスを恢復させたあと，イメージとそれが指す物事との間にある確実さと，感情と思想が緊密に結びついて生成された複雑な意味を悟らせる」[49] と指摘する。

3）会話的文体。例えば，「しかし，鏡の中の醜い様子を見える方が…人間に対して，『自分を忘れた者は福がある』と言った」（杜運燮「Narcissus」），「今，彼は笑って，/（ある鼻を垂らし

---

[47] 本文に引用される九葉派の詩作はすべて『九葉派詩選』によるものである。

[48] 蓝棣之：《前言》，《九叶派诗选》，人民文学出版社，1992 年版，第 1-28 页。

[49] 袁可嘉：《新诗现代化的再分析》，《“九叶诗人”评论资料选》，华东师范大学出版社，1996 年版，第 26-27 页。

ている子供，ご飯を炊いている痩せて小柄の娘/と背中にぶら下がってへらへらと笑っている赤ちゃんを指している)/『彼らは私のすべての心を消耗してしまったのだ！』と言った」（穆旦「小町一日」）等。その他，オーデンの擬人化された抽象観念，パノラマ式の視点なども中国詩人に受容された。

また，九葉派の詩人は「詩によって社会闘争に『参加』し，社会の弊害，苦難と人間の異化を暴き立てる。…彼らの詩はできるだけ現実に根ざして，現実を透視する，そして深く感受している上に日常生活の深さに突撃する，上っ面描写しない」[50] とされている。社会性と個性が統一化される九葉派詩人の創作には，オーデンの詩精神との合致が認められる。オーデンの「戦時にて」は中国詩人にとって，「抗戦」を題材にするモダニズム詩の例範であった。穆旦は，「戦士へ」，「野外演習」，「農民兵」，「ひとりの戦士が柔しさを求めるとき」などの作品を「抗戦詩録」（『益世報・文学週刊』1947.6.7）という総題のもとにまとめた。唐祈の「西北ソネット連作」，杭約赫の「復活の土地」などの作品は，「戦時にて」の影響が顕著である。オーデンの詩は 1920 年代のモダニズム詩運動の高潮を継承しつつ，第二次世界大戦の現実と緊密に繋がっていたため，抗日戦争期の中国詩人に新しい道を示していた。

詩論では，袁可嘉がオーデンの詩法を中国現代詩の理論と結びつけ，「新詩の現代化」理論を提出した。1940 年代に彼は天津と上海の『大公報』の「星期文芸」，天津の『益世報』の「文学週刊」，『文学雑誌』，『詩創造』，『中国新詩』などの文学誌に，オーデン論を発表した。彼はオーデンの詩を重要な例範として論じた。「詩と晦渋」（『益世報』「文学週刊」1946.11.30）では，彼はオーデンが完全に歴史から抜け出し，日常事物を巧みに組み合わせることを通じて，総合的な効果を達成するという特徴を指摘する。また，「新詩現代化の再分析」（『大公報』「星期文芸」1947.5.18）に，彼は「オーデンと若干の他のモダニズム詩人たちは，現代のパイロットが高空に身を置くような視点を取ることが好きで，映画の技術における水銀灯で集中に照射するような方法を通じて，足の傍らの物事を突然拡大や縮小する過程を明晰に表現し，特別で有効な感覚を与えた」と指摘する。そして，「新詩の演劇化」（『詩創造』1948.6）に，袁は「オーデンは習慣として心理的了解を通じて詩作の対象を描写する。ウイット，聡明さおよび文字を運用する特殊な才能により，様々な対象物が生き生きと描き出されている。しかしながら，詩人が取り扱われる対象に対する同情，嫌悪，痛恨，諷刺は，比喩的に表現されるにとどまる。旧世代の詩人は物事の本質の了解を重んじるが，此処でわれわれは心裏の探索を着眼する。リルケが沈潜的，深厚的，静止的彫像の美を代表している一方で，オーデンは活発的，広範的，機動的流動体の美の最高の見本である。前者は深さがあり，後者は広さがある」と指摘する。このように，袁にとって，オーデンの詩法は中国現代詩にモダリティの資質を獲得する方法を示している。

---

[50] 蓝棣之：《前言》，《九叶派诗选》，人民文学出版社，1992 年版，第 27 页。

四　結論

以上のように，オーデンは鋭く対立していた日中両詩壇に，ほぼ同時期に紹介され，後年の日中の現代詩人にも影響を与えた。とりわけ彼の影響を受けた詩人たちは日中戦争を体験した世代である。改めて日中両国におけるオーデン受容をまとめ直しておこう。

戦時下の日本では，『新領土』を中心とする反ファシズム的文学誌に，オーデン作品の翻訳が掲載されていた。とりわけいち早く紹介されたのが，オーデンが中国で発表したソネット「中国兵士」及び彼とクリストファー・イシャウッドの共著『戦争への旅』である。しかし，言論統制下の日本では，日本の知識人たちは時勢に配慮しなければならなかった。日本の戦後詩では，オーデンのエッセイや詩句がそのまま引用されていることが目立つ。

一方で中国の現代詩は，オーデンの技法を様々な方面から摂取している。中国では彼の訪問後，中国ではオーデン・ブームが起き，各地の文学誌や新聞で盛んに紹介・翻訳していた。特に，1940 年代に西南聯合大学におけるエンプソンの英詩の講義を通じて，中国の現代詩人たちが，積極的に彼の詩を翻訳，評論，受容していた。中国では，西南聯大の教員と学生が中心となり，オーデンの翻訳と研究を進めた。

このような比較文学的アプローチを取ることによって，東アジアにおけるオーデン受容という新たな視座を，いささかなりとも切り開くことが出来ると考えられる。

（ちん　せん・言語文学専攻）